

本報告に対して、DR 材では冷延鋼板の $\bar{\gamma}$ 値には凝固冷却速度の差がほとんど認められなかったが、HCR 材では薄スラブの方が $\bar{\gamma}$ 値が高いのは熱延鋼板の結晶粒微細化にデンドライト 2 次アーム間隔と Ti 炭窒化物の寄与によることが討議された。また極低 S 鋼では Ti 炭化物の析出が遅れるとのコメントがあつた。

以上の討論から直送圧延 (DR, HCR) では、特に厚板において粗大 γ 粒の微細化のための圧延の最適化の必要性和、厚板、熱延板、冷延板においてはマイクロアロイの非平衡析出、複合析出を含む固溶・析出挙動の予想された重要性が実験結果から実証された。凝固過程を含む直送圧延の実験は難しさはあるが、今後量産化が進む

直送圧延材の性能向上のために重要な基本的認識が深まったといえよう。

連鑄-熱間圧延直結化の推進には、材料の研究のみならず当日討論された他部門との緊密な連携が必須であり、この点からも上工程から下工程まで同一テーマで討議された本討論会は極めて意義深いものであつた。

終わりに講演者各位、質問状を寄せられ当日の質疑やコメントをいただいた方々、ならびに会場で熱心に討論に参加された皆様に厚くお礼申し上げます。

以上本討論会は多くの関心を集めましたので、「鉄と鋼」で特集号を企画し発行することになりました。あわせてご報告いたします。

編集後記

編集委員の拝命を受けて以来既に 2 年が過ぎた。この間数多くの論文・技術報告を査読させていただき査読委員として感じた点を私見として以下に述べたい。

鉄と鋼に論文・技術報告を投稿したことのある方であれば誰でもおびただしい修正意見がつけられて戻されてきた経験があると思う。あるいはほとんど修正要求のない論文もあるかもしれない。ここで注意していただきたいのは修正要求の多少は論文の質的レベルとは無関係であるということである。

投稿論文は当然著者の独創的な研究成果が盛り込まれなくてはならない。この成果があるからこそ、著者と査読者との間で活発な意見交換が行われ質の高い論文となつてゆくこととなる。修正要求の少ない論文はもちろんそれだけで立派な論文も多いが、査読者としての経験ではこのような論文はややもすると独創的な成果や十分な考察が不足している場合が少なくない。

投稿者は返却されてきた論文の修正が多いといつて悲観することなく質の高い論文作成に努力していただきたい。

8 ページという限られたページ数の中で自分の研究成果を冗長に流されることなく必要かつ十分に表現し、読者にその内容を理解してもらうことは、実験・研究を苦心して行うことと同程度に困難を伴うことであろう。しかし研究成果を発表することにより鉄鋼技術向上に寄与することができるという意識を持ち作成にあたつてもらえば必ずや立派な論文となりうることを確信している。

編集委員の一人として少しでもこの論文作成に際しお手伝いができればこれ以上の喜びはないと思つている。特に今まで優れた研究成果を上げながら、論文・技術報告発表の機会がなかった会員の皆様からの活発な投稿を期待している。
(N. S.)